



# 就学義務猶予免除者等の中学校卒業程度認定試験

平成30年度 国 語 (40分)

## 注 意 事 項

- 1 試験開始の合図があるまで、この問題冊子の中を見てはいけません。
- 2 この問題冊子は全20ページです。  
試験中に問題冊子の印刷不鮮明、ページの<sup>らくちょう</sup>落丁・<sup>らんちょう</sup>乱丁及び汚れ等に気付いた場合は、手をあげて試験監督者に知らせなさい。
- 3 試験開始の合図の後、受験地、受験番号、氏名を解答用紙に記入しなさい。
- 4 解答は、各設問の指示に従い、全て解答用紙の解答らんに記入しなさい。
- 5 試験終了後、問題冊子は持ち帰ってかまいません。

1

次の1から5までの問いに答えなさい。

1 次の①から④までの各文の——線部のカタカナの部分にあたる正しい漢字を、それぞれのアからウまでの中から一つずつ選び、解答らんの記号を○で囲みなさい。

- |   |              |   |    |   |    |   |    |
|---|--------------|---|----|---|----|---|----|
| ① | アツいお茶を飲む。    | ア | 暑  | イ | 厚  | ウ | 熱  |
| ② | 議長をツトめる。     | ア | 努  | イ | 務  | ウ | 勤  |
| ③ | 音楽をカンシヨウする。  | ア | 鑑賞 | イ | 干涉 | ウ | 感傷 |
| ④ | 彼はシンチヨウな性格だ。 | ア | 伸長 | イ | 慎重 | ウ | 新調 |

2 次の①と②の各文の——線部の漢字の正しい読み方を、それぞれのアからエまでの中から一つずつ選び、解答らんの記号を○で囲みなさい。

- |   |        |   |     |   |     |   |     |   |     |
|---|--------|---|-----|---|-----|---|-----|---|-----|
| ① | 相似の図形。 | ア | そうに | イ | あいじ | ウ | あいじ | エ | そうじ |
| ② | 人形を操る。 | ア | あやつ | イ | あやか | ウ | あずか | エ | あなど |

3 次の①と②の各文の——線部の漢字の正しい読み方を、解答らんにひらがなで書きなさい。

- |   |           |
|---|-----------|
| ① | 給食費を納入する。 |
| ② | 彼の器は大きい。  |

4 次の①と②の（ ）にそれぞれあてはまる言葉はどれか。後のアからオまでの中から一つずつ選び、解答らんの記号を○で囲みなさい。

- ① 大きさに言っではいるが、（ ）問題ではない。
- ② 水族館には、（ ）種類の魚がいる。

ア とんだ      イ たいした      ウ あらゆる      エ きたる      オ さる

5 次の①と②の（ ）にあてはまる言葉はどれか。後のアからエまでの中から一つずつ選び、解答らんの記号を○で囲みなさい。

- ① 彼は（ ）から指示が的確だ。

ア 頭が痛い      イ 頭が上がらない      ウ 頭が重い      エ 頭が切れる

- ② 日頃のがんばりに免じて（ ）。

ア 目をつぶる      イ 目をかける      ウ 目を細める      エ 目をこらす

## 2

次の文章を読んで、後の1から6までの問いに答えなさい。記号で答える問題は、それぞれ、アからエまでの中から最も適切なものを一つずつ選び、解答らんの記号を○で囲みなさい。

ナンバー1か、オンリー1か

人気グループであるスマップのヒット曲「世界に一つだけの花」に、こんな歌詞がある。

「ナンバー1にならなくてもいい。もともと特別なオンリー1」

この歌詞に対しては、<sup>1</sup>二つの異なる意見がある。

一つは、この歌詞のとおり、オンリー1が大切という意見である。

世の中は競争社会だが、ナンバー1にだけ価値があるわけではない。私たち一人ひとりには特別な個性ある存在なのだから、それで良いのではないか、という意見である。

一方、反対の意見もある。世の中が競争社会だとすれば、やはりナンバー1を目指さなければ意味がない。オンリー1で良いと満足してはいけないのではないか、という意見である。

オンリー1か、それともナンバー1か。あなたは、どちらの考えに賛成するだろうか。

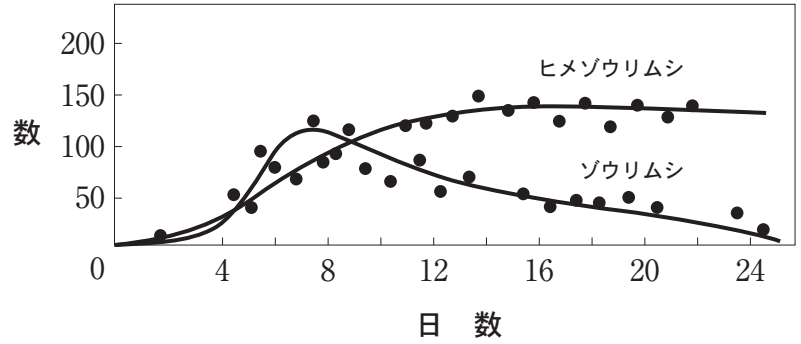
じつは、生物の営みを見回してみると、自然界には、この歌詞に対する明確な答えが示されている。

ナンバー1しか生きられない

生物の世界の法則では、ナンバー1しか生きられない。これが、厳しい鉄則である。

「ガウゼの法則」と呼ばれるものである。<sup>2</sup>

ソ連の生態学者ゲオルギー・ガウゼ(一九一〇―八六)は、ゾウリムシとヒメゾウリムシという二種類のゾウリムシを一つの水槽でいっしょに飼う実験を行った。すると、水や餌が豊富にあるにもかかわらず、最終的に一種類だけが生き残り、もう一種類のゾウリ



2種類のゾウリムシは 5 できない

ムシは駆逐されて、滅んでしまうことを発見した。こうして、強い者が生き残り、弱い者は滅んでしまう。つまり、生物は生き残りを懸けて激しく競い合い、共存することができないのである。ナンバー1しか生きられない。これが自然界の厳しい掟である。自然界でナンバー2はあり得ないのである。なんとこの厳しい世界なのだろう。

しかし、不思議なことがある。

ナンバー1しか生きられないのであれば、この世には一種類の生き物しか存在できないことになる。それなのに、自然界を見渡せば、さまざまな生き物が暮らしている。ナンバー1しか生きられない自然界に、どうして、こんなにも多くの生物が存在しているのだろうか？

A

という戦略

じつは、ガウゼの実験には続きがある。

ゾウリムシの種類を変えて、ゾウリムシとミドリゾウリムシで実験してみると、今度は、二種類のゾウリムシは一つの水槽の中で共存したのである。

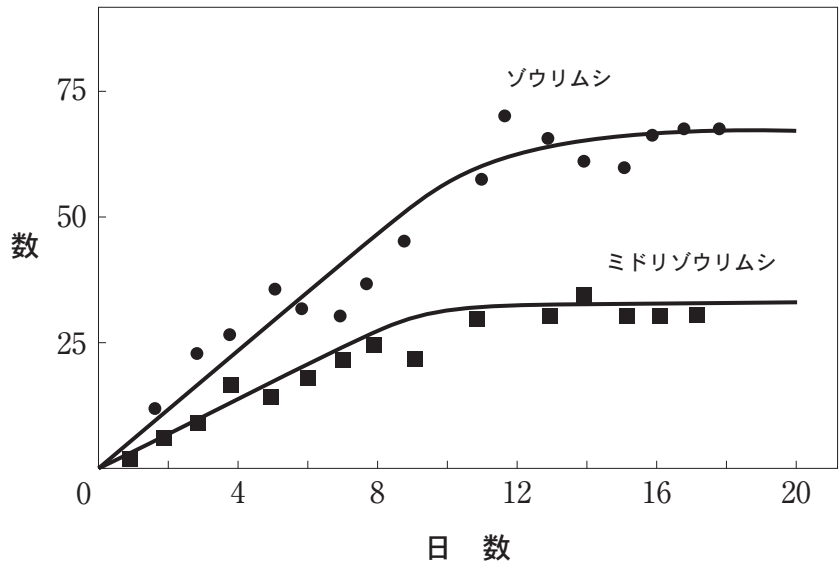
どうして、この実験では二種類のゾウリムシが共存しえたのだろうか。

じつは、ゾウリムシとミドリゾウリムシは、棲む場所と餌が異なるのである。ゾウリムシは、水槽の上の方において、浮いている大腸菌を餌にしている。一方、ミドリゾウリムシは水槽の底の方において、酵母菌を餌にしている。

このように、同じ水槽の中でも、棲んでいる世界が異なれば、競い合う必要もなく共存することが可能なのである。つまり、水槽の上のナンバー1と水槽の底のナンバー1というように、ナンバー1を分け合っているのだ。これが「棲み分け」と呼ばれるものである。

同じような環境に暮らす生物どうしは、激しく競争し、ナンバー1しか生きられない。しかし暮らす環境が異なれば、共存することができるのである。

ナンバー1しか生きられない。これが自然界の鉄則である。それでも、こんなにもたくさんの生き物がある。つまり、すべての生



互いにナンバー1であれば、5 できる

き物が、どこかの部分でそれぞれナンバー1なのである。

ナンバー1であることが大事なのか？ オンリー1であることが大事なのか？

この答えはもうわかりだろう。

すべての生物はナンバー1である。そして、ナンバー1になれる場所を持つている。この場所はオンリー1である。つまり、すべての生物はナンバー1であると同時に、オンリー1なのである。

このナンバー1になれるオンリー1の場所を生態学では、「ニッチ」という。ニッチはそれぞれの生物が固有に持つものである。ニッチは場所の場合もあるし、餌の場合もあるし、環境の場合もある。「ニッチ」とは、もともとは、装飾品を飾るために寺院などの壁面に設けたくぼみを意味している。やがてそれが転じて、生物学の分野で「ある生物種が息する範囲の環境」を指す言葉として使われるようになった。生物学では、ニッチは「生態的地位」と訳されている。一つのくぼみに、一つの装飾品しか飾ることができないように、一つのニッチには一つの生物種しか住むことができない。

<sup>注2</sup> マーケティングではニッチ戦略という、小さな隙間のような意味として使われるが、生物にとっては単に隙間を意味する言葉ではない。すべての生物が自分だけのニッチを持つている。大きいニッチもあれば、小さいニッチもあるが、ジグソーパズルのピースがぴったりと組み合わせるように、生物はニッチを分け合っている。仮にニッチが重なれば、重なったところでは激しい競争が残り、どちらか一種だけが生き残る。まさにゾウリムシの実験が示したとおりだ。

雑草は、競争を避けて攪乱<sup>注3</sup>のあるところに生えるというのが、生存戦略だ。しかし、雑草の中にもさまざまな種類がある。植物は集まって生えているので、どのようにニッチを分け合っているのかわかりにくいですが、無秩序に生えているように見える草むらであっても、植物がニッチを分け合っていて共存していると考えられている。

(<sup>いながきひでひろ</sup>稲垣栄洋『雑草はなぜそこに生えているのか』による。)





4 A にあてはまる言葉はどれか。

ア ナンバー1

イ 無秩序

ウ 棲み分け

エ 競争

5 文章中の二つのグラフの見出しにある 5 には同じ言葉が入る。あてはまる言葉を文章中から二字で書き抜きなさい。

6 この文章に述べられている筆者の考えにあてはまるものはどれか。

ア 自然界には様々な生物があるので、ナンバー1かオンリー1か単純には決められない。

イ それぞれの生物は、ナンバー1になれるオンリー1の場所を固有に持っている。

ウ 雑草の場合には多様な種類があるため、ニッチが無秩序に重なり合って生えている。

エ 生物は生態的地位のために棲み分けを行っているのではないため、ナンバー1しか生きられない。



## 3

次の文章を読んで、後の1から6までの問いに答えなさい。記号で答える問題は、それぞれのAからEまでのの中から最も適切なものを一つずつ選び、解答らんの記号を○で囲みなさい。

友だちの輪になかなか入ることのできない新生の伊藤空良は、部長の冬馬、副部長の谷崎、同級生のしーちゃんに誘われ文芸部に入る。文芸の面白さを伝えるために開かれた句会(自作の俳句を持ち寄り、よいものを選ぶ会)で、空良は自分の俳句が認められうれしい気持ちになるが、それは、同じクラスの颯太が、サッカー部の先輩とトラブルになっているのを見掛けたときの気持ちを表現したものだ。句会から数日、夏美や百合、颯太ら、クラスメイトが教室にそろっている。

「すごかったよね、伊藤さん。三番目に得点が多かったんだもん。あの俳句、おじいちゃんに教えたら、たいしたもんだって」

「ありがとう。わたしはね、葱坊主注1の俳句がいちばん好き」

「どんなのだっけ？」

「負けるなよ何があっても葱坊主」

「ああ、あった、あった。葱坊主」

斜め後ろの席から野球部が頭をつきだしてきた。

「坊主、坊主って、オレのことかよ」

自分の頭を指でつんつんしている。

「さわってもいいぜ」

「さわらない」

ソッコー、その子がいった。

「気持ちいいって、やってみるよ」

「無視、無視」

わたしも、しっしつと野球部の頭を払った。なのに。

「さわってみろよ。歯ブラシみたいだぜ」

颯太がのってきた。

「あたしがさわってあげる」

夏美が立っていた。

「あははは、いい、いい。ほんとに歯ブラシだ」

もう手が伸びていた。

「一回百円」

野球部が夏美に手のひらをだした。

「バーカ」

「なら五十円」

その手のひらを夏美がひっぱいた。

「で、なに話してたの」

夏美がその子にいった。

「このまえの句会で、伊藤さんの俳句が三番をとったの」

「すげえじゃん」

野球部。

「どんなの？」

夏美の声がとがっているように感じるのは気のせいだろうか。

「坊主の俳句？」

野球部がうれしそうにわたしを見る。

「違うって。春の朝傷つくことがかわいいのだ、だよね」

その子がわたしのかわりに答えてくれる。

「うん」

「もう一回いって」

夏美の命令するような声に、その子がゆっくりという。

「春の朝傷つくことがかわいいのだ」

「なんか、かっこいいじゃん」

ごめん、野球部。ほめてくれてるのはわかるけど、でもかっこいいというのは違うような……。

「まるで少女マンガのヒロインみたい」

夏美が冷ややかにいった。そのとたん、そうとしか見えなくなった。悲しみに酔ってうつとりしているヒロイン。センチメンタルなヒロイン。<sup>2</sup>わちゃ、頭をふった。

「かっこいい俳句もあったよ」

その子がとりなすようにいった。その子……。句会に来てくれたのに、名前すら覚えていない。しーちゃん。こういうところが、わたし、いけないのかな。

「悔しさに眠れぬ夜も蘆の角。<sup>3</sup>これも伊藤さんのだよね」

颯太の目がわたしを避けるように動いたのがわかった。

「わたしね、この俳句を二点にしたの。あつ、ごめん。三点じゃなくて」

「いいのいいの、ぜんぜん。ありがとう」

「だけど、まずい。<sup>3</sup>糸を通して、颯太のひりつとした気持ちが伝わってくる。」

「なんなんだよ、俳句も野球みたいに、点数入んの？」

野球部がのんきにきいてくる。

「俳句が書きだされて、そのなかから三点の句、二点の句、一点の句を選ぶの。それで、いちばん点数が高い俳句が、なんだっけ」

「天の句」

なんとか話題を変えたい。

「伊藤さんの俳句は三番目で、なんていうんだっけ」

「人の句」

「百合、さっきの俳句、もう一度いって」

夏美が命じた。この子の名前、ユリっていうんだ。

「悔しさに眠れぬ夜も蘆の角」

そうだよねと、ユリがわたしを見る。

「うん」

糸が張りつめている。颯太にはわかっている。わたしがなにを思い浮かべてこの句をつくったのか。土足で自分のところに踏みこまれたと感じたのだろうか。自分の悔しさを利用して句をつくったと思ったのだろうか。でもね、わたしだって眠れなかったんだよ。だけどやっぱりごめん。わたしは俳句をつくることで気持ちに整理がついた。ことばにすることで、らくになった。ほんとうにそう感じた。でも、あんたはそうじゃないよね。

「蘆の角ってなに？」

野球部がきいてくる。

「なんなの」

ユリもわたしの顔を見る。

「なんだよ、おまえ、わかんねえくせに点入れたの」

「悔しさに眠れぬ夜、で、ぐっとくるじゃない」

「蘆の角は、蘆の芽。角みたいな鋭い形をしてるんだって」

すこしでも話題をずらしたくて早口で答えた。

「蘆ってなに」

野球部が重ねてきいてくる。

「ヨシと同じ。夏になると、ヨシズ、さげるでしょ。あのヨシ」<sup>注2</sup>

答えながら、どうやったら話題を変えられるか考えた。

「窓の外にぶらさげたり、立てかけたりするやつ？」

ユリの声。

「うん、そう」

「ああ、わかった。あれか」

野球部の声。

だけど颯太はなにもいわない。ひともいわない。わたしから顔をそむけたままだ。いったい、なにを思っているの。だめだ。ちゃんといったほうがいい。

「蘆はまっすぐに伸びるの。ぐんぐん、ぐんぐん、まっすぐに。夏にはひとの背丈を越えて伸びる。だからヨシズになるの」  
プラスに受け取ってほしい。

「蘆は、だから蘆は、すごい」

<sup>4</sup>どうか希望が伝わりますように。

「伊藤さん、三つ俳句をだしたんだよね。もうひとつはどんなのだったの」

ユリはよく覚えていた。ありがたい。だけど、いま、それをきかれるのはつらい。

「へばい句」

「気になる。教えて」

「いいなよ」

夏美がわたしを見る。

「ほんとへばいんだって。点だって、まったく入らなかったんだから」

「もったいぶらないですよ」

「うん、わたしも知りたい」

「オレも」

颯太だけが、なにも言わず横を向いている。

ああ、このままじゃだめだ。いおう。

「春の闇あることを知り動けない」

颯太の緊張が痛いほど伝わってきた。そうだよ、ごめん。どうか、押しつけがましく聞こえませんかように。

「句会が終わってすぐ、先輩が返句をくれたの。俳句に俳句で返事をくれた。それがね、

春の闇蹴飛ばし走る白きすね

いつか、かならず、そうなる日が来るからって」

「おおつ、さすが先輩。かつこいいじゃん」

野球部がおおいにほめる。

やっと颯太と視線が合った。強い視線。けど、気持ちは読み取れない。

その目を見返し、もう一度いった。

「春の闇蹴飛ばし走る白きすね。いつか、かならず、そうなる日が来る。わたしもそう思う」

「その先輩、その場で俳句、つくったってこと？」

夏美の声。

「うん」

「なら、あんたもやってみてよ。いま」

「できないって」

「いいからやってみせてよ」

なんて強引なひとなんだろう。なのに、ほかの三人まで、つくってみせろとわたしを見る。颯太まで。なんでこうなるの。わたしにできることはふたつしかない。無理無理無理と机につつぶすか、やってみるかだ。



「ほらっ」

夏美があごの先を動かした。

いやだ、こういうの。

「つくったら、わたしの頼みも聞いてくれる？」

「なに？ 頼みって」

「いますぐ思いつかないけど」

夏美はうすく笑った。

「いいよ。へんなことじゃなきゃね」

やるしかない。

深呼吸をし、頭のなかで歳時記のページを繰った。でも、ぜんぜん思い浮かばない。ううっ。だめだ。どうしよう。

ああ、だれか助けてほしい。だれか。

みんなの顔を思い浮かべた。谷崎さん！ 冬馬さん！ しーちゃん！

助けて、お願い！

——むずかしく考えなくていいんです。思っていることを、そのままことばにすればいい。季語をつければ句がふくらみますから安心して。ほら、そのままいえばいい。いまの気持ちをそのまま——。

声が聞こえた。まえにもこんなことがあったような。同じようなことが。いったい、いつだったろう。たしかにあった。

「早くしてよ」

思い出した。あのとときだ。

「休み時間終わっちゃう」

顔をあげた。

「それでは一句献上いたします」

「いいぞー、伊藤！」

野球部の声に、みんなが期待のこもった目をわたしに向けた。  
声をだした。

むちゃぶりにため息ひとつ春の空

机につつぶした。限界です。

「五七五になってる」

「すげえじゃん、伊藤」

「あんた、空に、自分の名前、掛けたわけ」

「おつ、すげえ」

へっ？ 顔をあげた。

「こいつ、わかってねえの」

颯太がにたりとした。

あつ、そっか。いまわかった。空に空良。もう一度、机につつぶした。不覚でした。頭の上で笑い声がする。まあいいか。颯太、あんたが笑っているなら、それでいい。

(もりの森林こみち『わたしの空と五・七・五』による。)

(注1)葱坊主……ネギの花のこと。

(注2)ヨシ……アシの別称。アシの茎を編んで作ったすだれをヨシズという。

1 負けるなよ何があつても葱坊主 とあるが、この俳句の「葱坊主」のような言葉を何というか。

ア 句会

イ 季語

ウ 返句

エ 歳時記

2 わちや、頭をふつた とあるが、このときの「わたし」の気持ちはどれか。

ア 野球部がほめてくれたことを素直に認めることができない気持ち。

イ 夏美の感想と自分が句を作ったときの考えが同じでうれしい気持ち。

ウ 夏美の感想によつて頭に浮かんだイメージを消し去りたい気持ち。

エ 句会に来てくれた子の名前すら覚えていない自分を責める気持ち。

3 糸を通して とあるが、文章中では、心のつながりを表すものとして「糸」が使われている。誰と誰のつながりを表したもののか。

ア 空良と颯太

イ 颯太と夏美

ウ 空良と夏美

エ 颯太と百合

4 どうか希望が伝わりますように とあるが、この「希望」とはどのようなことか。

ア 「蘆の角」は、春の季語であるということを、みんなにも知ってほしいということ。

イ 苦労して初めて作った自分の俳句を、夏美にみんなの前で認めてほしいということ。

ウ ぐんぐん伸びる蘆のように颯太もまっすぐに大きく伸びてほしいということ。

エ 緊張を感じている颯太のためにもこの場では句会の話はしないでほしいということ。

5 強引なひと とあるが、夏美の強引な性格がよく表れている動作を文章中から一つ抜き出しなさい。

6 おつ、すげえ とあるが、同級生がそう考えた理由を次のようにまとめた。(A)と(B)に入る言葉を文章中からそれぞれ抜き出しなさい。

短時間で作った俳句が五七五になっていたうえに、俳句中の(A)という言葉に名前の(B)を掛けることができていたから。

次は山田さんが書いた新聞への投書の下書きです。これを読んで、後の問いに答えなさい。

## ゴミって全部ひとくくりに？ 山田 陽子(15歳)

最近、コンビニエンスストアの前にゴミ箱がないなあと不思議に感じている人はいませんか。私の家の近くのコンビニエンスストアも、少し前までは店の外に設置されていたのに、この頃見かけなくなっただけと思ったら、店の外ではなく店内にゴミ箱を設置し直していました。その理由を聞いたところ、家庭ゴミを捨てる人が多いです。

そういえば、私が利用している駅のゴミ箱には、手製のふたが設けられ、「家庭ゴミを捨てないでください。」という貼り紙が貼ってあ

ります。家庭ゴミの回収が毎日ではないことが影響しているのだと思います。コンビニエンスストアや駅のゴミ箱に家庭ゴミを捨てるのはマナー違反だと思います。

でも、友人に話すと、「ゴミ箱はゴミを捨てるためにあるのだから、分別の決まりさえ守れば、どんなゴミを捨ててもいいと思う。厳しくすると、道端に捨てる人が出てくるのではないかな」という意見でした。私は納得できません。ゴミ箱だからといってどんなゴミでも捨ててよいとは思えません。皆さんはどう思いますか。

- 1 山田さんの投書の下書きの構成の説明として、最も適切なものを選びなさい。
- ア 初めと終わりに結論を述べ、自分の意見が読者に伝わるようにしている。
- イ 自分の地域と他の地域を比較することで具体例を提示し、問題点を浮き彫りにしている。
- ウ 意見の根拠となるデータを数値で示した上で、自分の意見に説得力をもたせている。
- エ 身近な体験をもとに自分の意見を述べ、反対意見も取り上げながら問題を投げかけている。

2 その理由を聞いたところ、家庭ゴミを捨てる人が多いです。とあるが、このままでは文末が不適切である。「多いです」の部分  
を正しく書き直しなさい。

3 あなたは、「ゴミ箱だからといってどんなゴミでも捨ててよいとは思えません。」という山田さんの意見に賛成ですか、反対ですか。次の条件にしたがって、あなたの考えを書きなさい。

【条件】

- ・最初に、山田さんの意見について賛成か反対か、あなたの立場を明確に書くこと。
- ・理由を具体的に書くこと。
- ・漢字や句読点を適切に使い、丁寧な字で書くこと。